

明滅する夏

芹沢一

雨が降っていた。夏の夜に降る雨は手始めとばかりにお
気に入りのスニーカーを侵し、次いでお気に入りのメッセ
ンジャーバッグを侵した。死に物狂いで自転車漕いだが、
そんな私を嘲笑うかのごとく雨足は強まる一方だ。アスフ
アルトの上で激しく跳ねた雨粒が、滑るように脇に流れて
大きな水たまりに合流している。最悪だ。最悪の一言に尽
きる。一刻も早く、足裏にひつつく濡れた感触をどうにか
したい。

家の鍵は英語の教科書の間挟まっついて、見つけるの
に手間取った。ようやく鍵が開いたかと思えば扉の隙間か
らは明かりが漏れてきて、本気でおじさんを殴ってやろう
かと思った。

「ただいま。いるなら開けてよこのやろう」

「すまん」

「全然思っていないでしょ」

「投げつけた鍵が背中に当たり、おじさんが首だけで振り

返る。いつものようにツナ缶を開けていたらしく、椅子か
ら動く気配はない。濡れ鼠の同居人を目の前にして、タオ
ル一枚出してはくれないのか。いっそ笑えてくる。

おじさんは何も言わずに前へ向き直ってしまった。相変
わらず覇気のない後ろ姿で、スプーンと歯がかち合う音を
鳴らしている。鬱陶しいほど空気は湿っているというのに、
一口飲み込む度にすっかり乾燥した自身の唇を舐めていた。
猫みたいな食べ方をする人だ。

壁掛けの電波時計は入学祝いに叔母がくれたもので、デ
ザインセンスは最悪だが秒単位で正確に時を刻んでくれる
優れもの。現在の時刻は九時十二分。雨に濡れたメッセ
ンジャーバッグを適当に投げ置いた。そして直後には後悔し
た。質量の増したメッセンジャーバッグが、鈍い音を立て
てフローリングの床を転がった。水滴が飛散する。後で拭
いておかなければ。

「おじさん、洗濯物」

「入れておいた」

「やったね。あんがと」

「ああ」

「あ、ちょっと、またスリッパ履いてないし。ちゃんと履いてよ。フローリングに足跡ついちゃう」

「ああ」

「このやろう……履けつつってんの。おらよつと」

おじさんは、ツナ缶にかけるマヨネーズを探してきよろきよろと辺りを見回している。そこへスリッパを投げて寄越した私を景気よく睥睨した。

「マヨネーズ、出しっ放しだったから冷蔵庫に入れといた」

「……余計なことを」

「おじさんがきちんとしまわないのが悪いんでしょ」

おじさんが積極的に反応を示すのはツナ缶が絡んだときだけで、もしかしたらその他のことは全て、どうでもいいの一言で片づけてしまうかもしれない。いつか、もし唐突に爆弾が降ってきたりしたらどうするの、それでもどうでもいいの、と尋ねたことがあったけれど、おじさんは面倒くさそうに私の顔を見ただけで、結局答えてはくれなかった。でもおじさんはきつと、本当に爆弾が降ってきたとしてもツナを掬って頬張っている。そして爆弾が炸裂するその瞬間を、鮮度を失った鮪のような目でじつと見ている。

信じられないくらい神経が太い中年なのだ。

雨はやまない。

夕方頃から降り出した雨のため仕事が進みなくなって暇を持て余している、というのが私の推理だ。テレビは競馬の様子を中継していたけれど、おじさんが鮪以外の生物に興味を示すことなんてあるはずもないので、きつと何か音が欲しくてテレビをつけたままにしていただけなのだろう。私がテレビの電源を切っても、おじさんは部屋の中央にある椅子にどっかりと腰を下ろしたまま微動だにしない。ただ、新種の生物を発見した生物学者のような目で、ツナ缶の成分表示をしげしげと眺めているばかりだった。何が面白いのか私にはよく分からない。

おじさんは極端に物臭なので、毎日欠かさず食べているツナ缶のことでさえ妥協してしまうことがある。マヨネーズが冷蔵庫にあると知った途端、マヨネーズを掛けることが面倒になったらしい。銀色のスプーンで何も掛かっているツナを掬って、じつくりと眺めてからそれを口へ運んだ。今日は髭も剃っていない。

「おじさん」

おじさんは私の声に反応して上体をキッチンの方に向けた。私がマヨネーズの容器を投げて渡すとわずかに眉を上げた。そんな嬉しそうな顔をするほどマヨネーズが欲しかったなら、自分で取りに行くなり私に声を掛けるなりすればいいのに。おじさんは礼の言葉一つくれはしなかったけれど、いそいそとマヨネーズを掛けていたのでまあよしとした。

一つ息をついてから、私は冷蔵庫から牛乳パックを取り出した。賞味期限は明後日となっていたので丁度いい。

「何してるんだ」

「何って、餌の準備だけ」

「餌？」

「餌。子猫って牛乳飲ませていいのかな」

「猫？ どこに」

「ここ」

私の懐から飛び出した真っ黒の生き物を見た瞬間、おじさんは凄く嫌そうな顔をした。そんな顔しなくても。

「拾ったのか」

「うん。可愛かったから持って帰った」

「お前が世話するのか」

「当たり前じゃん。おじさんいつまでいるかも分かんないわけだし」

「大学の間は」

「一日中私がついてなきや駄目ってわけじゃないでしょ。

ほーらしい子いい子」

「…：勝手にしろ」

「なんでちよつと偉そうなの？ ここ私んちなんだけど」

ふてくされたおじさんが、少し多めにツナをスプーンで掬った。私より一回りも大きな手は、ツナを掬うときだけは妙に繊細に動く。私はそれがなんだかおかしかった。節くれ立った指が銀色のスプーンを弄ぶ様がツボだった。

そこでようやく、私は一刻も早く濡れた靴下を脱いでしまったかったことを思い出した。バランスを崩しながら、なんとか靴下を脱いだ。脱衣場で適当に着替えをして、おじさんが取り込んでくれたらしい洗濯物の山から適当なタオルを手にとって髪を拭いていると、こちらを見ていたおじさんと目が合った。

「ねえ、おじさん。明日サークルで遅くなるから」

「ああ」

「もうすぐイベントだから練習も激しくなるみたい。この暑いのに何時間も楽器吹いてばっかいられるかよ、つてのにさ」

「なら辞めるといい」

「いや、そういうことじゃなくてさ」

「それと、牛乳を飲ませるなら下手なものはやめておいた方がいい。そのくらいの大ささなら餌も食えるだろうし、水で十分だ」

「マジか。おじさん意外と詳しいね」

「似合わなくて悪かったな」

「一応褒めたつもりだったのに」

顔からして今日もニヒリズム全開なおじさんは、中身を全て掬ってしまった銀色の缶をいまだしげしげと眺めている。足音を床に染み込ませるように、柔らかく上下するおじさんの爪先。窓の外で水が滴る音を聞く。撫でつけるとわずかに身を振った子猫。硝子玉みたいな双眸。ひどい既視感に襲われた。同時に、無性にラムネが飲みたくなった。夏だからだろうか。

「何か面白いテレビやってないの」

「知らん」

ちやうど濡れた靴下のように気持ち悪い会話の隙間を埋めようとしたのだが、一瞬で失敗に終わった。辟易する。おじさんは基本的に鮪以外の生物には興味を示さない。なんてつまらない中年だろう。

じつとりとまとわりつく夏の夜の生温い空気。午後九時の憂鬱。心地いい緩慢さで部屋に充滿する気怠さ。肩に力を入れてのことさえ馬鹿げているような気がしてくる。

小さな黒猫を拾ったのだ。私は動物の中では猫が一番好きだったので、雨に打たれてか細く鳴く子猫を見捨てられなかった。お気に入りのスニーカーが雨水に侵されようと、メッセージジャーバッグの中に提出期限の近い奨学金に関する書類が入っていると、私がペット禁止のアパートに住んでいようと、そんなことは全てどうでもよかった。

雨はやまない。しとしと。雨音はオノマトペにするためで忍び寄る幽霊の足音みたいだ。幽霊には足なんてないのかもしれないけれど。間の抜けた音。意味もなく笑える。最近はそのことばかりだった。

今まで生き物を拾ったことはなかった。母親が決して許さなかったからだ。猫が大好きな私は何度か捨て猫を拾って帰ったことがあったが、その度に母親に締め出されて玄関の前で夜を明かすことになった。それでも懲りずにいた小学生の頃の私は、今よりよほど遅しかつた。

行き倒れていたおじさんを拾ったのはその場の勢いだったが、今思えば、動物を飼うことを許されなかった幼少期の反動だったのかもしれない。『飼育』は誰が書いたんだっけ、だとかそんなことを考えながら、気づけばおじさんに飯を食わせていた。こうして猫を拾った今となっては、正直なところおじさんは拾わなくてもよかったかなあ、とも思う。

猫だろうがおじさんだろうが、等しく生物なのだから放つてはおけなかったの。私つてば聖人すぎる。おじさんはいつもとなんら変わらない無表情で、頭おかしいんじゃないのか、と一言。

軽い冗談のつもりだったのに本気で狂人扱いされて、さすがに傷ついた。そんなことがあって以来、私はおじさん

相手に軽口を叩くのはあまり気が進まない。

特に話すこともないので、なんとなくおじさんを観察している、じろりと睨まれてしまった。

「じろじろ見るな」

「見てないから。この中年自意識過剰すぎウケる」

「ぶつぞ」

「二言目にはそれかい。私も大概だけど、おじさんも相当コミュ障だよ。もつと楽しもうよ、会話」

「ぶつぞ」

「私の言うこと聞いてた？」

例のごとく、会話は途絶えた。最初こそこの気持ち悪い間を持って余していたのだけれど、最近はすっかり気にならなくなっていた。そもそもおじさんには会話する気がないのだから、私がいくら気にしたって意味がないことに気づいたからだ。おじさんは部屋の真ん中で椅子に腰掛け、無言でフローリングの木目を睨みつけている。

私の同居人の中年は、ときどき私には価値の見出せないことに集中して取り組んでいることがあった。フローリングの木目はときにツナ缶の成分表示だったり、雨の日の物

干し竿だったりした。そこに意味を見出せない私は、いったい何を見ているのかとおじさんに尋ねることもせず、ただ何かをしげしげと眺めるおじさんの、少し陰を湛えたような目を見ていた。以前ドライアイなのだと言っていたおじさんの目は、涙の膜が人のそれより少し薄いように見える。

私は大学の講義とサークル活動、おじさんは仕事。それぞれのすべきことを全てこなし家で落ち着く頃には、大抵日付が変わっていた。深夜だというのに意味もなく起きているのは私もおじさんも同じ。早く寝たらいいのにと思っているのは私だけで、おじさんはきっと、私が寝ていようが起きていようがどうでもいいと思っっている。あるいはどうでもいいとさえ思っていないのかもしれない。

「だから、じろじろ見るな」

「見てない……いや、見た。おじさんごめん。何が悲しくてこんなしょうもない中年見つめなきゃなんないんだろうね。私がどうかした。許してほしい」

「ぶつぞ」

「謝ったじゃん！」

にやあ、と私が腰掛ける椅子の下から聞こえた猫の鳴き声。手を伸ばした。拾ってきた子猫は三日で随分と懐き、甘えたような声で鳴きながら、私の手の甲に顔を擦りつけている。子猫の名前は毛玉になった。おじさんが、その方が分かりやすくいいだろう、と言ったから。私が提案したジロウという名前は、ありきたりだからという理由で却下された。どうも腑に落ちない。

私が勢いをつけて立ち上がると、毛玉は弾かれたように震えてから一目散に駆けていった。毛玉の尻を目で追った。流れる視線の先には、銀色のツナ缶を掌の上に乗せたまま、一心にフローリングの木目を睨みつけている中年。無難な目鼻立ちの中に、ぼつかりと浮かび上がったような黒い目。振りすぎたあとのソーダ水のように間の抜けたおじさんの表情。夏の夜は、たとえどんなに晴れていてもじめじめとした余韻を落とす。蔓延する。

柔らかに上下する爪先は、さつきから絶えず一定のリズムを刻んでいた。どこかで聞いたことのあるリズム。面白みも何もない、ただトン、トン、と響く爪先の音。どこかで。トン、トン。なんだか笑えた。

思わず笑ってしまった私を一瞥して、しかし何を言うでもなく、おじさんは再びトン、トン、と爪先を鳴らし始めた。おじさんがツナ缶を手放すことはなかった。たまに手の甲に乗せたりして、空になったツナ缶を様々な角度から眺めていた。やはり意味を見出せない。なんだか馬鹿げている、むず痒くて、そういうもの全てをないまぜにして舌の上で転がしているとまた笑いそうになって、堪えるのは大変だった。歯ブラシを取りに洗面所へ向かう。

来る日も来る日も、絡みつく素振りで空間を侵す夏の夜。熱帯夜。また、無性にラムネが飲みたくなった。冷蔵庫の中にあるのは緑茶と薬と調味料だけ。どう足掻いたってラムネなんてあるはずもない。ふしゅう、という間の抜けた音を、おじさんの爪先の音の中に聞いた気がした。すぐに夏の夜に溶けていってしまったけれど。

おじさんは日雇いの道路工事とかバイトで食い繋いでいるフリーターなのだろう。以前は正社員として企業勤務していたこともあるのだと言っていた。何故辞職したのか、あるいは辞職せざるをえなかったのか、私はおじさんから

聞かされたこともないし、尋ねてみようともしわなかった。そんなことを尋ねてみたところで私の生活がどうなるわけでもない。なんでもないことだ。それに、変に突っついておじさんがへそを曲げたりしたら堪ったものではない。

おじさんは支給されたらしい作業服をリュックに詰め込んでいた。その背中を眺めていると、足元に毛玉が擦り寄ってきた。早起きな猫だ。かわいいなあ、もう。

毛玉と戯れていると、リビングの方からおじさんの視線を感じた。

「今日は遅くなりそうだ」

「日、跨ぎそう？」

「分らん」

「ちよつとは協力しようという誠意的なものをさ」

「分らんものは分らん」

「はいはい、分かりましたよ、と。コンビニのおにぎり置いてやろうか」

「俺はそれで一向に構わん」

「本当、冗談通じないよね。ときどき真剣にイラっとくるよね」

「すまん」

「許す」

「すぐ許すならいちいち喧嘩をふっかけるなよ。わずらわしい」

「今ので燃え上がったわ。一人でおいしくご飯を食べることにするね」

「……面倒なやつだな」

「もう絶対に許さん」

思ったことをそのまま言葉にしてしまう正直者のおじさんは、こうして女子大生に真っ向から喧嘩をふっかけてくることがある。ひどい言い草だ。面倒なやつだなんて、今まで出会ったどんな人間よりも、これから出会うどんな人間よりも、おじさんにだけは絶対に言われたくない。私の人生これから先何年あるかは分からないけれど、断言できる。

「悪かったよ」

「謝るときくらいさ、ちよつとは申し訳なさそうにしてみせたらどうなの。実は結構前から思ってた」

「生まれつきこういう顔なんだ。仕方ないだろう」

「生まれつきって本当に生まれつき？ それはおじさんの両親に失礼だと思うよ。実の息子が生まれた瞬間からそんな死にそうな顔してたら失神する」

「そういうことじゃない」

「なに、じゃあどいいうことなの。ねえねえ」

「……そろそろ出る。寝ていたらすまん、起こすかもしれない」

「またはぐらかした！」

心底面倒だ、とでも言いたげに眉を寄せ、おじさんは大袈裟にため息をついた。われながら悪質な絡み方だ。行ってきます、行ってらっしゃい、なんて律儀に挨拶を交わす間柄でもないのです、おじさんはいつものように何も言わず部屋を出ていった。今日は講義が昼からなので、今から五時間ほど暇を潰さなければならぬ。腕の中で大人しくしている毛玉を撫でる。家を出るまで目一杯遊んでやろう。にやあ、と小さく鳴いた毛玉の、硝子玉みたいな双眸を覗き込む。その中におじさんが見えたような気がして背後を振り返ったが、そこには入学と同時に買った姿見が立っているだけだった。当たり前だと思った。鏡の中の私と目が

合った。鏡の中の毛玉はどこか明後日の方を向いていた。複写された私の肩越しに、なんとなくおじさんの顔を思い出していた。なんだかおかしくなった。小さく肩を揺らす鏡の中の私。その腕の中、毛玉は私の顔を見上げていた。

回顧する。

私がおじさんを拾ったのは毛玉を拾うおよそ一ヶ月前だから、今から一月半ほど前のことになる。おじさんは、私が暮らすアパートの前でお腹を空かせて倒れていた。どこの少女漫画だよ、と思ったが、おじさんは顔が特別整っているわけでもないし、歳が同じで実は同じ大学に通っていたとかそういうわけでもないし、というよりただのやる気のない変な中年だし、世の中そんなに上手くいくわけないじゃないか、と一人納得した。身長が高い。真っ黒の子猫に毛玉と命名するほどネーミングセンスが常軌を逸している。ツナ缶が好物。常にマジダルイわ、とでも言いたげな顔をしている。その程度のことしか私はおじさんに関して知らない。ついでに本名も知らない。拾ったその日からおじさんと呼んでいる。今更本名を教えてもらったところ

で、私が一方的に気まずくなるだけだということも知っている。

「おじさんさあ」

おじさんは、私がこうして声を掛けても基本的には反応を示さない。

呑気な日曜の昼下がり。せっかく晴れているので、部屋の窓を全開にして風を通していた。吹き込んでくる空気は生温かったけれど、いつまでも尾を引く日常の淀んだ空気よりはずっと心地いい。

「おじさんは、ここに来る前は どうして たの？」

こちらをちらりとも見ようとしないおじさんに、答えてはもらえないのだと悟った。木製の椅子に深く腰掛け、開け放たれた窓の向こうに見える隣のアパートをじっと見つめている。おじさんの手にはやはりツナ缶があつて、私はまた笑えてきた。

「じゃあさ、なんでそんなにツナ缶好きなのか教えてよ」

おじさんが視線をこちらに投げた。

「好きなものは好き、それだけだろう。理由なんて考えたこともなかったよ」

「そりやそうか。でもおじさん、馬鹿みたいにツナ缶ばっか食べてるからさ。思い入れのある食べ物なんじゃないかなーって、それだけ」

「期待してくれたところ申し訳ないな」

「微塵も思っていないでしょ」

嘘。きつとそれは真つ赤な嘘だ。

驚いた。おじさんは会話の途中、逃げるように視線を窓の方へ追いやったのだ。それが意味することを、私は瞬時に悟った。

普段、おじさんは私の目を見て話をする。だから私も自然と、おじさんの目を見て話すようになっていた。

尋ねてみたくないわけではない。徹底的に追求したい。でも、それではまた気まづくなってしまう。なぜか笑えてきた。意味不明なおじさんの意味不明な新しい一面を、私は知りたいと思っている。おじさんの本名、おじさんが今までどう生きてきたのかはまるで知りたいと思わなかった。われながら不思議だ。知恵の輪を解く感覚に似ている。おじさんがツナ缶に固執する意味を、おじさんは隠している。そしてそれは、嘘をついてまで隠す価値のあ

ることらしい。ここに来る前どのように生きてきたのかは、教えないと露骨に態度で示したのに。私はあえて何も訊かずに、緑茶を注ぎにキッチンへ向かう。おじさんが窓の外を眺めていてくれてよかった。

「暑いね」

「そうだな」

「まだ暑さは続きそうだってテレビで言ってたよ。早く涼しくなればいいのに」

「夏は嫌いじゃないから、別にどうでもいい」

「出たよどうでもいい。そろそろどうでもいい縛りで会話してみよっか。……ねえちよっと、黙って顔背けるのやめてちよっと」

窓の外にも、窓の中にも、まだ等しく夏が居座っていた。目の奥が痛くなるほど冷えた緑茶を流し込みながら、ふと振り返って重なってしまった視線の先。いつの間にかキッチンに向いていたおじさんの目は、窓硝子をたやすくすり抜ける夏の日差し全てを飲み込んで、薄らと陰を湛えていた。

海が見たい、とおじさんが零したから、毛玉を連れて海を見に行くことになった。せつかくの夏だし海水浴行きたよね、と言ったら、おじさんは、違う、と言ったきりどこかばつが悪そうにしていたので、私はそれ以上何も言うことができなかった。

財布とスマートフォンとハンカチをおじさんのリュックにねじ込み、毛玉は夏仕様のカゴバッグに詰めて、その他は何も持たずに家を出た。おじさんは何も言わなかったから、恐らくこれで正解なのだと考えている。きつと、おじさんはただ単に海が見ただけだから。毛玉の存在がバれないよう細心の注意を払いながら電車で一時間揺られて、とはいっても私たち以外に乗客のいない車両でいくら毛玉がにやあと鳴いたところでバッグに忍び込ませたその存在が発覚することはなく、私とおじさんと一匹は何事もなく海へと向かった。

その駅は、無人駅だった。初めて訪れた駅だったが、きつともう長い間無人駅だったのだろうと想像することはたやすかった。

三両編成の車体はホームの幅からすればかなり長い自

身の身体を持て余すようだったが、それでも律儀に停車線びつたりと停車した。運転手の中年の男性は広い額に汗を光らせながら、暑いから気を付けて、と笑顔で言ってくれた。私としては男性の方が心配だったが、上手い言葉が見つからなかったもので、ありがとうございます、と一言礼だけを言って、そそくさとホームへと降り立った。直後、少し後悔した。隣で頭を掻いている中年に、見習いなよ、と声を掛けたが無視された。これだからおじさんは。

ぶしゅう、という間の抜けた音とともに扉が閉まる。黄色の車体が夏の午後の陽炎に飛び込んでいった。そして、鈍重に駅から遠ざかっていく。緩やかなカーブに差し掛かった黄色は、線路際ぎりぎりまで茂った背の高い夏草に隠れて見えなくなった。

錆び付いて駅名を読み取ることも出来ない赤茶色の看板や、大学生の私が腰掛ければひとたまりもなく崩れてしまいそうな木製のベンチ。何もかもが、この場所が普段から無人であることを裏付けている。周囲を見回してみても、視界に入る色と言えば夏草の緑と線路に敷き詰められた石の鼠色くらいで、小学生の夏休みの宿題に風景画を描くに

は丁度いいかもしれない。

「電車で二時間でこんなに田舎だよ。まるで異世界に来たみたい、ってそれは言いすぎか」

「ああ」

「もつとテンション上げていこう！ 浮かれていかないとこの先間違えなくつらいよ！」

「声が大きい」

「さいですか。もう黙るね」

「ぜひそうしてくれ」

閉口した。それと同時に、ようやく顔を出すことを許された毛玉がカゴバッグから勢いよく顔を覗かせた。かわいい。

おじさんが欲しがるものなんて毎日食べているツナ缶くらいのものでしたので、私は物珍しさから途端に海に行きたくて仕方なくなつた。サークルの練習は休んだ。おじさんの都合に合わせ、私が休むしかなかったからだ。先輩の怖い顔がふと脳裏をよぎつたが、すぐに脳内から追い出した。本当に怖いからやめてくれ。断りは入れたものの、どうせ、この大事な時期に、とかなんとか難癖をつけてくる

に決まっている。それなら年がら年中大事じゃない時期なんてないじゃないですか、と言つてやりたい。暑くて仕方ないし丁度いい。最近はとにかく暑くてやっていられない。「さあおじさん。私この辺り全然知らないからガイドよろしく」

「まず、この先に海がある」

「見りや分かるわそんなもん。他は？ 休めそうなお店とか」

「休まなければ問題はない」

「さてはてんで知らないなこの中年。おじさんがこの海がいいって言ったんじゃん！」

「俺は海しか知らん」

「……オーケーオーケー、じゃあとりあえず海目指そう。海の家くらいあるでしょ」

額に右手をやって空を仰いだ。すると、おじさんが無言で私の方に左手を突きだしてきた。

「……何してんの」

「貸せ。鞆くらい持つてやるよ」

「いいよ。別に重くないし」

「いいから」

「もしかして、気とかつかつてたりするの」

「違う」

「なんだ。ついにおじさんがデレたのかと」

おじさんがやたらカゴバッグを持ちたがるので、私は何だか気味が悪くなった。予想していたより軽かったのか、おじさんは拍子抜けしたような顔でカゴバッグを小脇に抱えた。それ、そういう持ち方するやつじゃないんだけどなあ。

「にやあ、と一声上げて顔を覗かせた毛玉が、眩しそうに目を細めている。おじさんはさすが肉体労働者なだけあって暑さには慣れているのか、いつもと変わらずぼんやりとした表情で遙か向こうの水平線を見ていた。

「にやあ、と鳴いておじさんの脇腹辺りからこちらを見ている毛玉の頭を撫でてから、私は改めて夏の空を仰いだ。青の絵の具を塗りたくったような空だった。似たような色をした海が、前に戻した視線の先には広がっている。綺麗だなあ。」

気づけばおじさんに置いていかれていた。沈黙してしま

ったおじさんの後ろを、二、三步間隔を取ってついていく。目の前の中年はいつもどこまでも自由で、私はそういうところに少しだけ憧れていた。

砂浜に辿り着いた頃には、辺りはすっかり橙色に沈んでいた。

すぐ近くの海の家でかき氷を食べた。ブルーハワイが好きだと言ったら、おじさんはイチゴの方がうまい、と反論してきた。珍しいこともあったものだと思った。ツナ缶以外に好きな食べ物あったんだ、と少し感動した。宇宙の始まりを見たかのような気分になった。

それでも、イチゴ味のかき氷を食べているおじさんは、ツナ缶を食べている時ほど幸せそうには見えなかった。もしかしたらツナ缶と同じくらい好きなのかもしれないけれど、少なくとも私が見た限りでは、かき氷を食べているときのおじさんの目はいつもと変わらず一貫して無感動だったように思う。ツナ缶にはあってかき氷にはないもの。おじさんの中ではその違いが明確であるらしい。もちろん、私にはさっぱり分からない。

「ツナ缶とかき氷のイチゴだったらどっちが好き？」

「かき氷」

「え」

なんでもないような顔で即答したおじさんは、なんでもないような顔で白砂を踏み締めて進んでいく。

「マジで？ マジでツナ缶よりかき氷の方が好きなの？」

「味の好みで言えばな」

「嘘、絶対に嘘」

「なんでお前が俺の好みに口出すんだよ」

「だって、そんなの絶対ありえない。おじさんツナ缶食べてる自分の顔見たことないでしょ」

「あつたらそれはそれで問題な気はするが」

「見せたい！ 今度おじさんがツナ缶食べてるところ写メ撮って見せたいよ」

頭おかしいんじゃないのか、と言われた。

「……いきなり何を言ひ出すかと思えば、別にそんなこと、どうだっていいだろう」

それきりおじさんは沈黙してしまった。おじさんの視線に合わせて、私の視線も自然と海の方へと流れていった。

さんざめく。さざなみの隙間に、まるでダイヤモンドを破砕して鑲ちりばめたようなきらめき。きつと、神様からまるごとと愛されているのだろう。指先に引つかかる潮風の感触。

両手を広げて抱き締めるようにすると、あんなに指先を強く弄んでいたのが嘘みたいに、なんの引つかかりもなくするりと抜けてしまった。

「こういうのを美しいっていうんだろうね。なんていうか、壮観」

「そうだな」

「……もつと何かないの。見たかったんでしょ、これ」

「言葉も出ないほど感動している」

「ダウト」

そうは言ってもなあ、と零して、おじさんは日に焼けた首筋を撫でている。

おじさんは今日も意味不明だ。ツナ缶よりかき氷の方が好きだと言ってみたり、海が見たいと言いだしておきながら、こうして目的のものが見れたというのにもいつもと変わらずぼんやりとした表情をしていたり。嘘でももつと嬉しそうにしたらどうなの、と思わずにはいられない。少し腹

がたつ。

水平線を見つめるおじさんの目が、橙色の光を、破砕したダイヤモンドのきらめきをつるりと反射していた。

「なあ」

「素敵な感想でも思いついた？」

「いや、そういうわけじゃない」

「もう帰りたくなつたとか？ 私もうちよつと見ていたんだけど」

「いや、違う」

「もう、まどろっこしいな。じゃあ何」

おじさんは一瞬、視線を私の足下に落とした。

「今だから言うけどな。その毛玉、近いうちに死ぬぞ」

小脇に抱えたカゴバッグを覗き込み、飛び出してきた毛玉の頭を撫でつけながらそんなことを口走った。毛玉は猫科の目を三日月の形に細めながら、ふにう、と鼻を鳴らし、おじさんの手に擦り寄っている。

「死ぬの？ この子」

「ああ。たぶんな」

「たぶんてそういう物騒なこと言わないでよ」

「すまん」

「……ああ、そっか。だから私がこの子を拾ってきたとき、あんなに嫌そうな顔したの」

「ああ」

「そっかあ……」

私はカゴバッグから毛玉をそつと取り出し、胸の前に抱いた。一瞬身じろいだが、毛玉は大人しくしている。

「なんでそれをこういうときに言うかなあ。空気読んでよ」

「今だから、と言っただろう」

「本当に空気読めないんだね。……出ていくんだ」

おじさんが部屋を出ていくつもりなのだと思つたのは、私の目を瞬きもせずに見ていたからだ。

「どうにも長居し過ぎたらしい。いつまでもお前のところにいるわけにもいかなないからな」

「私は別に気にしないけど」

「俺も、近い内に死ぬ。たぶん夏が終わらない内に」

毛玉を取り落としそうになって、慌ててカゴバッグに戻した。

「え、嘘、初耳。ていうか脈略なさすぎて変な驚き方しち

やったし。病気か何か？」

「もしかしたら病気なのかもしれない」

「なにそれ。自分でもよく分かっているみたいない言い方」

「実際分らんからなあ。俺、なんで死ぬんだろう」

「いや知らないから。自殺とか？」

「自殺なんかするわけないだろう」

「ちよつと意味がよく分かんないんだけど」

「だから、俺にだつてよく分からん。なんとなく、近い内に死ぬ気がするってだけだ。頃合だったんだよ」

おじさんが話すことは概して意味不明で意味もなく笑える。さすがにそれは嘘でしょ、といつもみたいに笑い飛ばしてやろうとしたのだけれど、私の腕の中の毛玉を見下ろすおじさんの目に見覚えがあつて、声を出して笑うこともままならなかった。私が毛玉を拾ったときに感じたひどい既視感の正体を漸く知った。瞠目した。喉の奥で間の抜けた音がして、私は息をすることを忘れた。

そうだったのか。確かに、おじさんが何か確証を持って毛玉が死ぬと言っているのだとしたら、同じ目をしたおじさんが死ぬのもなんら不思議なことではない。硝子玉みた

いな双眸。無難な目鼻立ちの中に、ぼつかりと浮かび上がったような黒い目。

帰ろう、と言つておじさんが踵を返した。私は首だけで振り返つて、おじさんの背中を呆然と見つめていた。小脇に抱えられたカゴバッグから顔を覗かせた毛玉の、私を一心に見つめる乾いた眼球。忽然と頭をもたげだす、歯を食いしばつて耐えなければならぬほどの衝動に似た激情。必死に押し隠して、努めて平常を装つて、私はおじさんの背に問いかけた。

「行くあては？」

「ない。が、お前の部屋に転がり込む前もそうしてきたんだ。今更どうということはないよ」

「ほんと、感動しちゃうくらい駄目な大人だよ」

「うるさい」

おじさんと毛玉が死ぬ。信じたわけではないし信じられるはずもないのに、なぜかそれが本当のこのように思えた。閃く晩夏の夕日、ダイヤモンドのさざなみ、湾曲する水平線の向こう側で密やかに息をしている夜の気配。涙が出そうだ。

その一切に背を向け、小さくなったおじさんの背中を追った。おじさん、と声を掛けると足を止め、なんだ、と低い声で応えてくれた。舌の上で転がっていた言葉の一つ一つを丁寧に飲み下して、なんでもない、の一言にすり替えた。訊きたいことは山ほどあって、でもそれを一つ一つ訊いていくにはどうやったって時間が足りない。最後に一度だけ、と思つて振り返った先に広がる景色にまた感動した。私はきつと、何度でも感動するのだろう。同じ景色に同じように。何度でも。

プルタブに人差し指をかけて、てこの要領で開封する。銀色の缶の中に詰められた鮪のほぐし身にマヨネーズをかけて、スプーンでかき回して完成。所要時間はわずか一分。リビングに戻るといつの間にか毛玉が椅子を占領していたので、膝の上に乗せて無理やり座った。毛玉は小さく唸つて逃げようとしたが、頭を適当に撫でつけているとすぐに喉を鳴らして大人しくなった。ちよろい。でもそんなところがとてもかわいい。

フローリングの木目を爪先でなぞりながら、私はツナを

一口掬って口に含んだ。脂ぎった食感。マヨネーズの風味も相まって、非常にジャンキーな味に仕上がっている。それをためらいなく食す私の女子力は間違いなくマイナス。自覚して思わず眉を寄せた私の顔を、私の膝で呑気にくつろいでいた真つ黒の毛玉が見上げてくる。ツナ缶とスプーンで両手が塞がっていたため、いつものように撫でることもできない。

「お前も食うかい？」

スプーンに盛られたツナに顔を近づけて、即座に顔を背けた。思わず笑ってしまった。正直な猫だ。でもそんなところがとてもかわいい。そうか、お前はこれ、嫌いか。微笑ましい気持ちになつて、私はもう一口ツナを口に含んだ。

いつもよりだっ広く感じる私の部屋。たった一人居候が出て行った程度で、こうも部屋の印象は変わるものなのかと感心した。それでも、私も私の膝で惰眠を貪る毛玉も、まるで何事もなかったかのようにこうして過ごしている。

当たり前毎日がずっと続くと思つていたわけではない。でも、私はただ手放しに、明日もまた今日と同じ明日なのだと思つていた。なんの根拠もなくただ漠然と、これまで

もそうだったように。

私は二ヶ月ほど前、このアパートの前で行き倒れていた中年男性を拾った。そしてその彼は一週間ほど前、わざわざばかりの荷物を黒いリュックに詰めて、この部屋を出ていった。その背を見送ってから、カレンダーをめくっていなかったことを唐突に思い出して、カレンダーを一枚めくった。九月のたった二文字は、私に様々なことを思い出させた。

おじさんの荷物があまりにも少なかったので、いまだ実感が湧かずにいたりする。猫もツナ缶も置いていってくれた。単なる忘れ物なのかもしれないし、おじさんが取りに帰ってくる前にすっかり食べ尽くしておいてやろう。

ツナ缶とはなかなかうまいものなのだと、今更ながら気づいた。今度おじさんに会ったら謝ろう。また会えるとは思っていないし、会いたいとも思わないけれど、それに、会って話すこともない。きっと私が一方的に気まずい思いをするだけだから。

「あ、こら。動かないで」

毛玉が動きだす気配に膝頭を強ばらせたが、想像してい

たよりもずっと穏やかに私の膝から飛び降りた。こちらを窺うように瞬く硝子玉みたいな双眸は、いつもよりわずかに色が濃いように見える。

無風にほど近い残暑の昼下がりは剥き出しの腕にじわりとまとわりついて少し不快だったけれど、いつまでも尾を引く日常の淀んだ空気を浚^{さら}ってくれるような気がしたから、窓を開け放してその傍の椅子に腰掛け、外の景色を眺めていた。部屋の隅に追いやられた木製の椅子は、おじさんの不在を嘆いているかもしれない。この椅子、邪魔だしいつそのことリサイクルショップに売ってしまおうか。

そういえばおじさんは、いつもこうしてツナ缶片手に外を眺めていた。ここから、私の部屋からおじさんが何を見ていたのか、私は一生知ることもないまま生きていくのかもしれない。あるいは、私にもいつか分かる日がくるのかもしれない。それは誰にも分からない。窓枠が切り取る景色はいつも隣のアパートとわずかばかりの空で、私は物干し竿の隙間から覗く空を見つめていた。青の絵の具を塗りたくったような空だった。今朝方降った雨の雫が物干し竿にとどころどころ附着しているのが見える。日差しを吸い込

んできらめく水滴に目を眇めた。綺麗だなあ。俯けば、瞼を前髪の毛先が掠めてむず痒い。

結局、勝手気ままな猫のような中年にいいように振り回された二ヶ月だった。散々人の生活をかき乱しておいて、自分のことはほとんど何も知らせることなく出ていってしまつた。知恵の輪は結局解けず終いだ。たとえば訊きたかつたことというのはおじさんの本当に好きな食べ物だとか、私を海に誘つた理由だとか、毛玉が死ぬと言つたのにはどういふ根拠があつたのかだとか、そういう訊くに訊けないことばかりだつたから、やはり仕方なかつたのかもしれない。好奇心は猫を殺すという。

なんとなく思い立って、おじさんがしていたように爪先でフローリングを打つた。トン、トン。どこかで聞いたことのあるリズムなのだけれど、記憶は蘇りそうにはない。唸る私をそれほど遠くないどこかでおじさんが鼻で笑つた気がしたので、意地でも思い出そうと暫くは足を踏み鳴らしていた。すると、ただ足を踏み鳴らしているだけのこの行動に何か意味があるような気がしてきたから戦慄した。完全におじさんに毒されてしまつている。すぐにやめた。

お、と声が漏れた。私は俯けていた顔を上げた。

夏が重い腰を上げる気配を、部屋を吹き抜けた一陣の風の中に感じた。待ち侘びた。窓を開けていて正解だった。

私の二十回目の夏はきつと、私が今まで過ごした十九回の夏よりずっと長く、私の人生に居座り続けるだろう。閃く晩夏の夕日、ダイヤモンドのさざなみ、湾曲する水平線の向こう側で密やかに息をしている夜の気配。その全てを、まるでシャッターを切つたように鮮明に記憶している。どんなにしがみつこうとしたつて忘れてしまうことの方が多い人生の中で、こんなに忘れがたい予感がしている。

思い返してみると、やたらと雨の多い夏だった。そして意味もなく笑えた夏だった。意味不明のおじさんに意味もなく笑わされた夏だった。そんなとりとめのないことばかりに埋め尽くされた毎日を、私は二ヶ月も過ごした。気づけば夏が遠ざかろうとしていた。

私が爪先で鳴らした音に反応したのか、いつの間にか足下には毛玉がちよこんと座つていて、じつとこちらを見上げていた。抱き上げられるのにも慣れたのか、毛玉は私に胸を掴まれても身じろぐことはなかつた。硝子玉みたいな

双眸は、薄い涙の膜が光を反射してくるくると回っているように見える。

「きつともうすぐ、夏は行っちゃうから」

もう少し頑張つてね。にゃあ、と鳴いた毛玉の黒い目に感動した。綺麗だなあ。

きつとこれで、ようやく私は気怠い夏の真ん中から抜け出せるのだ。チカチカと私の目を焼いていた夏から、両足ともによくやく。

さよならおじさん。もう九月になったことだし、私は一足先に秋を迎えにいかうと思うから、気が向いたら夏から抜け出しておいで。今のところ元気な毛玉も連れていくから安心してほしい。また会えたら、そのときはツナ缶くらい用意してあげよう。

肺の奥が痛むほど、思いきり空気を吸い込んだ。空気がおいしい。重い腰を上げた夏が、軽快に足音を踏み鳴らして行き過ぎようとしている。この年の、この季節の行く末を私だけが知ることになるのかもしれないと考えると、熱を帯びた網膜が鈍痛を伴い始めたような気がして、ほんの少し泣けた。

月刊缶じうす一月号

2012年 12月 25日発行

編集人 千夜時雨 姫川乃愛 芹沢一

発行所 広島大学文団BOX